

様式2 令和7年度 清瀬市立 清瀬第五中 学校 学校評価

学校教育目標	・思索 深く静かに考える人 ・和敬 明るくおもしろい人 ・剛健 たくましく、がまん強い人	育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動	○育成を目指す資質・能力 ・自他の生命を尊重する心 等 ・課題解決のための思考力 等 ・健やかな心と身体 等 ○特色ある教育活動 ・地域連携、小中連携の取組 ・チャレンジルームとサポートルームと連携した教育 ・地域・社会の人材を活用した体験学習や講習会の実施
目指す学校像(ビジョン)	【目指す学校像】 笑顔・あいさつ・ありがとう があふれる清瀬五中 【目指す児童・生徒像】 自分で考えて行動する力 をもつ生徒 【目指す教師像】 生徒が主役であることを大切に、感謝を忘れず、教師であることを誇りに思う教師		

前年度までの学校経営上の成果と
【成果】・専門家を招いての出前授業や講演会、農園活動などの体験学習を通して、豊かな心と体の育成を行うことができた。
 ・地域・保護者・小学校と協力して「花の子カラ プロジェクト」などの活動を行い、連携をさらに深めることができた。
【課題】・ユニバーサルデザインを取り入れた授業展開や教室環境の整備を進めてきたが、ユニバーサルデザインについての説明が不足していたため、周知を図っていく。
 ・体験学習を実施する際に、よりねらいや目的を意識して行うように計画をたてていく。

柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策
		評価	課題及び次年度以降の改善方策(案)		
		取組指標	成果指標	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策	
安心・安全・信頼がある学校生活	いじめ調査、学級環境適応感尺度(アセス)、各種アンケート等を実施し、生徒一人一人の実態を把握する	4	3	相談しやすい環境を整えていくことはとても重要なことだと思う。普段からの授業や声掛けなどの、信頼関係によるものだと思うので、引き続き積極的に生徒と関わって欲しい。カウンセラーを利用するのは少ハードルがあると思うので、気軽に利用できる体制を作ることが大切だと思う。また、否定的な回答の割合が経年変化で変わらないため、具体的な取組へのアプローチが必要になってくると思う。	今年度より1月1回スクールカウンセラー(SC)通信を発行し、SCの認知度を高めている。次年度以降も継続して発行するとともに、朝礼等でも紹介を行い、より認知度を高めて生徒が相談しやすい雰囲気形成していくとともに、教員からの声掛けも行っていく。
	毎日のあいさつを習慣化し、感謝の気持ちや社会のルールの大切さ等を身に付けさせる	3	4	あいさつはかなり習慣化されていると思う。学校に訪問した際には、生徒たちからしっかりと挨拶をしてきてとても素晴らしい。登下校の際もきちんとした身振りをしたり道を譲ってくれたり地域住民として誇らしい。	学活や道徳などを通じて、何のためにあいさつをするのかを意識させるとともに、教職員自らが積極的にあいさつをしていき、あいさつの習慣のさらなる定着を図る。
	豊かな心と体の育成	学校行事や学級活動や総合的な学習の時間、生徒会活動等を通じ、主体性や社会性を育む	4	3	生徒が自主的に積極的に活動していてとても素晴らしいと思う。一方で主体性や社会性を育むの目に見え成長したと分りづらく評価しづらいと感じるので、自ら何をするかという機会を増やすことも大事になってくると思う。また、一部の生徒だけでなく全生徒が主体的に係れる活動を、学校運営協議会や学校支援本部に働きかけて実現して欲しい。
確かな学力の定着	出前授業や講演会などを各学年学期に1回以上実施していく	4	3	様々な分野で活躍されている方々をお呼びして、直接話を聞いたりフォローを見たりすることはとても貴重な経験だと思う。即効力ではなくても、日々の出来事や進路を考える時などに参考になってくれると思うので、今後も続けてほしい。一部、体験の意味を理解していない生徒がいる可能性があることなので、事前学習・指導をもう少しする必要を感じた。また、生徒から学びについての希望などをもってそれに即した内容で考えてみるのもいいと思う。	外部の専門家を招いての出前授業等は、生徒の成長にとっても大きな影響を与える経験であるため、事前学習・事前指導を丁寧に行い3年間を見据えて体系的に取組を進めていく。
	全教科でICT機器を活用した学習を展開し、授業内容の充実を図る	4	4	「ICTを活用するなど、わかりやすい授業を行っている」という質問に対して90%以上の生徒が肯定的な回答をしており、ICTの活用や定着はかなり進んできている。ICTの活用についての研修を昨年度同様今年度も実施したが、次年度以降も引き続き実施していき、活用を促進していく。	ICTに関しては、引き続き積極的に活用していけるように研修等を通じて定着を図っていく。一方で、ICTを使うことだけが目的とならないように、効果的な活用を図っていく。
	授業のねらい・目標を明確にし、流れ、振り返りを視覚に訴えた授業を行う	4	3	昨年度よりも、肯定的な回答をした教員の割合は8%増加し96%となっており、ほとんどの教員がねらい、振り返りなどを意識して授業を実践することができている。多くの生徒が学習に前向きに取り組んでいるが、「分からなかったことが分かるようになった」という質問に6%程度の生徒が否定的な回答をしているので、この割合を下げるためにさらなる授業改善を進めていく。	授業においての「ねらい」「目標」「流れ」の明確化は定着してきたので、今後は家庭学習の定着が図れるような取組を進めていく。
家庭・地域と連携し開かれた学校づくり	毎日のホームページの更新や年間30回以上学校からの便りを発行して情報発信につとめる	4	3	各学年、おおむね週1回ペースで学年通信を発行したり、毎日ホームページの更新を行ったりなど、学校からの情報発信を進めることができた。保護者の評価も、否定的な回答をした割合は1%のみだが、1割強が「わからない」と回答しているため、通信やホームページを見てもらうための周知を図っていく必要がある。	ホームページの更新や学年通信の発行は、今年度同様次年度以降も続けていく。学校公開に関しては、ホームページでの周知が公開の直前になってしまいうかつたので、早い段階でホームページにアップし、より多くの方に参観していただけるようする。
	地域・保護者・小学校と連携した活動を学期に1回以上展開していく	4	4	地域・保護者・小学校などと連携して「花の子カラ プロジェクト」を複数回実施することができた。また、教員のアンケートでも「地域・保護者・小学校と連携した活動を積極的に行った」に対して9割以上が肯定的な回答となっている。今後も、連携した活動を活発に行っていく。	地域・保護者・小学校と連携した活動については、「花の子カラ プロジェクト」を核として、今後も積極的に行っていき、中学生徒会と十小児童会が連携した活動も引き続き実施していく。
個に応じた充実した支援	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業展開や教室環境の整備を行う	4	1	9割以上の教員がユニバーサルデザイン(UD)の視点を取り入れた授業を展開している」と回答している。昨年度は「UDを取り入れた授業を実施している」という質問に対して65%の保護者が「分からない」と回答するなど、UDへの理解の低さが目立っていた。そのため、今年度はサポートルーム通信でUDについての説明を複数回にわたって紹介するなどの結果、「分からない」という回答は44%まで減少した。今後も、UDについての説明や紹介を行いさらに理解度を高めていく。	認知度が上がった取組は高く評価できる。しかし、成果指標が低いので、理解度をあげるために、改善策にあるようなサポートルーム通信等を通じて丁寧に情報発信を行う必要がある。また、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業がどのようなものかイメージがしにくいいため、丁寧に説明や紹介を行っていくことも大切になってくると思う。
	サポートルームやチャレンジルームとの連携を密にとり、支援を必要とする生徒の情報を全教職員で共有し、組織的に対応する	4	4	特別支援校内委員会・不登校対策委員会を交互に実施し情報共有を密に行い、通常学級・サポートルーム・チャレンジルームの連携を図ることができた。保護者への、「一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援を行っている」という質問に対して、4分の1の保護者が「わからない」と回答しているため、ホームページやサポートルーム通信などを通じて、今後も特別支援教育に関する情報を発信していく。	実際に利用していないなどのような感じなのかわかりづらいところがあると思うが、学校に来るのが少し辛いと思う生徒にとってはサポートルームやチャレンジルームのような居場所が学校にあることはとても重要なことだと思う。これから利用者は増えていく可能性があるため、引き続き組織的にサポートできる体制を整えきめ細やかな指導をお願いしたい。